

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：英語グローバル学科

資格：准教授

氏名：K. A. バート

研究分野	研究内容のキーワード
応用言語学、第二言語習得、日本学、社会文化人類学 Applied Linguistics, Second Language Acquisition, Japanese Society, Culture and Anthropology	第二言語習得、コミュニケーション言語教育、トランス・ランゲージング、内容言語統合型学習、社会文化人類学 SLA, CLT, Translanguaging, CLIL, Japanese Society, Anthropology and Culture.
学位	最終学歴
博士（応用言語学）Doctor of Education (USQ) 修士（日本学）MA in Advanced Japanese Studies (Sheffield) 修士（応用言語学）Master of Applied Linguistics (USQ) 準修士（教育学）Graduate Diploma in Secondary Education (VU) 学士（日本学・言語学）Bachelor of Arts (La Trobe)	Doctor of Education- University of Southern Queensland オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学言語教育研究科応用言語学専攻博士 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 教育方法	2005年1月から現在	学生一人ひとりの学力だけでなく、性格や背景についてもできる限り把握し、それぞれのレベルに応じた適切な指導や課題の提供に努めている。 外国語の授業では、実践的な英語力を強化するための教材を開発し、聞く・話す・読む・書くの機会を提供している。さらに、アクティブラーニングやタスクベースの言語学習を取り入れ、トランスランゲージングとCLIL（内容言語統合型学習）を教授法の中心に据えることで、学生の言語運用能力と専門知識の習得を同時に促進している。 社会学の授業では、異文化の視点の違いについて議論し、国際関係への理解を深めている。学生同士が積極的に意見を交わすことができるよう、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなどのアクティブラーニングを実施し、批判的思考を促進する場を提供している。 修士課程および博士課程の学生には、論文執筆や学会発表の指導を行い、批判的思考力を養うための助言を提供している。
2 作成した教科書、教材		
1. 武庫川女子大学の教材	2021年4月1日から現在	大学英語コミュニケーション科目教材作成、ビジネスライティング教材作成、リーディング教材作成、ライティング教材作成、英語学演習教材作成。ACE科目教材作成、現代コミュニケーション教材作成、卒業研究（ゼミ）の教材作成、論文英語演習教材作成。2023年から英語文化専攻の全てのコミュニケーション科目教材を作成。
2. 鳥取大学の教材	2019年10月1日から2021年3月31日	コミュニケーション教科書作成・編集、実践英語A・B教材作成、総合英語3・4教材作成、英語教育カリキュラムガイド作成、イマージョンプログラム作成。
3. English to the World	2019年9月から2020年1月	鳥取大学共通センターのコミュニケーション英語の教科書で、作成と編集担当。
4. Frontiers in Science IA and B	2017年から2018年	関西学院大学理工学部向け英語教材の作成・編集を担当。独自教材として関西学院大学出版会から出版。
5. Reading II Science and Global Issues	2017年から2018年	関西学院大学理工学部向け英語教材の作成・編集を担当。独自教材として関西学院大学出版会から出版。
6. 関西学院大学の教材	2016年4月1日から2019年9月20日	千刈英語集中講座のHomework Pack 作成。オープンキャンパス体験授業構築。大学レベルのコミュニケーション、リーディング、ライティング、EAP、ESP、TOEIC、科学技術関連の英語教材作成。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
7. 平松学園の教材	2005年7月24日から2016年3月31日	高校生・短大生のコミュニケーション、リーディング、ライティングの教材作成。留学生の日本語教材作成。海外研修引率。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学における各種委員、科目担当	2021年4月1日から現在	武庫川女子大学英語グローバル学科の准教授。国際センター・外国語教育推進委員、国際化専門委員会、外国人非常勤講師コーディネーター委員会、文学部教授委員会、大学院研究委員会、ACE運営委員会、学科フォーシード下懇談会委員。担当科目：大学で学生担任（ホームルーム）、現代コミュニケーション、ビジネスライティング、ライティング、リーディング、スピーキング、オーラルコミュニケーション、英語学演習、社会言語学、卒業研究（3年と4年ゼミ）。大学院で論文英語特殊演習、論文英語演習、修士指導、博士指導を担当。
2. 鳥取大学における各種委員、科目担当	2019年10月1日から2021年3月31日	鳥取大学教育支援・国際交流推進機構教育センター外国語部門の准教授。すべての外国語科目を担当。大学入試作成・監督・採点、センター試験監督、オンライン授業設置、常勤・非常勤講師のオンライン授業に関する説明会担当、E-Learning指導。担当科目：コミュニケーション英語、実践英語、総合英語、上級英語。
3. 関西学院大学における各種委員、科目担当	2016年4月1日から2019年9月20日	関西学院大学理工学部の常勤講師として外国人オフィス管理者、千刈英語集中キャンプのコーディネーター、理工学部のELR教務会委員を担当。担当科目：コミュニケーション、リーディング、ライティング、科学技術英語。
4. 平松学園における指導実績	2005年7月24日から2016年3月31日	国際コースと特進コース担当。留学プログラム担当、部活顧問、英語弁論大会・暗唱大会の指導。担当科目：オーラルコミュニケーション、英語ライティング、英語リーディング、英語会話、コミュニケーション英語、入試英語、留学生の日本語、留学生の日本社会。
5. ベイサイド中高等学校（オーストラリア）における指導実績	2005年1月23日から2005年6月30日	高校教員 担当科目：外国語としての日本語、英語、英語文学、社会学。
4 その他		
1. 1年B組の担任	2025年4月1日から2026年3月31日	武庫川女子大学英語グローバル学科の1年B組担任で、初期演習や丹嶺研修、MUSC 留学に関する統括業務、学生ガイダンスを行い、保護者との懇談・相談などを行った。
2. 2024年度博士論文口頭試問試験官担当	2025年2月	博士生の博士論文口頭試問を行った。
3. 2024年度修士論文口頭試問試験官担当	2025年2月	修士生の修士論文口頭試問を行った。
4. PanSIG Journal 査読委員	2024年10月から2025年3月	PanSIG Journal 査読委員として投稿論文を審査した。
5. 教育実習引率指導	2024年9月	小・中・高教育実習の引率指導として授業参観と指導を行った。
6. 2024年度オープンキャンパス体験授業担当	2024年6月から2024年10月	英語グローバル学科でのオープンキャンパスに参加し、英語文化専攻の「英語体験授業」を2回行った（6月23日、8月10日）。全回のオープンキャンパスに参加し保護者への相談対応を行った。
7. 2024年日下／フォッシー国際交換特別教授職プログラム運営委員	2024年5月10日から2024年10月29日	「日下・フォッシー国際交換教授職プログラム」のプログラム作成と教授の受け入れを担当。
8. 修士論文指導担当	2024年4月から2025年3月	武庫川女子大学大学院・文学研究科・英語英米文学専攻に在籍している1名の学生の修士論文指導を行った。
9. 2023年度修士論文口頭試問試験官担当	2024年2月	修士生の修士論文口頭試問を行った。
10. Profectus 査読委員	2023年11月から2024年3月	Profectus 査読委員として投稿論文を審査した。
11. 博士論文副指導教員	2023年9月から2025年3月	武庫川女子大学大学院・文学研究科・英語英米文学専攻に在籍している1名の学生の博士論文（副）指導を行った。
12. 庫川女子大学大学院文学研究科英語英米文学専攻講演会	2023年7月29日	庫川女子大学大学院文学研究科英語英米文学専攻講演会でどのようにすれば経験が研究の方向性を形成し、

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
13. 2023年度オープンキャンパス体験授業担当	2023年6月25日から2023年8月11日	探究を促進するかに関する発表を行った。タイトルは From student, to teacher, to researcher and back again: How experiences can shape research direction.
14. 日下／フォッシーン国際交換特別教授職プログラム参加	2023年5月7日から2023年5月16日	英語グローバル学科でのオープンキャンパスに参加し、英語文化専攻の「英語体験授業」を2回行った（6月25日、7月9日、8月11日）。全回のオープンキャンパスに参加し保護者への相談対応を行った。国際交換特別教授職プログラムの交換教授として選出され、Eastern Washington University で学生への講義や市民公開講座を行った。教えた科目は日本語、日本社会、言語学、バイリンガリズム、教育学習。
15. MUSC引率	2023年5月6日から2023年5月19日	英語文化学科2年生が参加する米国ワシントン州スポケーン市MUSCでの留学プログラムに2週間同行し、引率業務を行った。キャンパスで学生生活の支援、修了式と閉会式参加。
16. 2年S組の担任	2023年4月から2024年3月	武庫川女子大学の英語文化学科2年ACE担任の業務で、学生のガイダンス、保護者との懇談・相談などを行った。
17. 修士論文指導担当	2023年4月から2024年3月	武庫川女子大学大学院・文学研究科・英語英米文学専攻に在籍している1名の学生の修士論文指導を行った。
18. 2022年度修士論文口頭試問	2023年2月	修士生の修士論文口頭試問を行った。
19. Mukogawa Literary Review査読委員	2022年11月から2023年3月	Mukogawa Literary review 査読委員で、投稿論文を審査した。
20. 第38回武庫川学院英語オラトリカルコンテスト	2022年10月28日から2022年11月12日	大学英語スピーチコンテストの原稿確認、スピーチ練習、審査員。
21. 2022年度特別ゼミ担当	2022年6月14日	アメリカ分校から帰った学生のための特別ゼミを指導。「英語と日本語を活かして、世界理解を深めよう」という内容を実施。
22. 2022年度オープンキャンパス体験授業担当	2022年6月から2022年9月	英語文化学科での「オープンキャンパス英語体験授業」を行い、保護者への相談対応を実施。
23. 学科日下／フォッシーン国際交換特別教授職プログラム委員	2022年4月1日から現在	Eastern Washington University の教授がフォッシーン日下プログラムを参加し、学科代表としてプログラム運営、来日中の来訪者を案内し、授業に同行し、研究討議をした。
24. 1年S組の担任	2022年4月から2023年3月	武庫川女子大学英語文化学科の1年ACE担任で、初期演習や丹嶺研修、MUSC 留学に関する統括業務、学生ガイダンスを行い、保護者との懇談・相談などを行った。
25. 高大連携事業・入学前講義	2022年2月16日	武庫川女子大学に入学する前の高大連携事業・入学前講義として武庫川女子大学附属高校3年生に対して「Critical thinking in the English classroom」講義と演習を行った。
26. 2021年度修士論文口頭試問	2022年2月	修士生の修士論文口頭試問を行った。
27. 第37回武庫川学院英語オラトリカルコンテスト	2021年11月20日	大学生スピーチコンテストの審査員。
28. 2021年度オープンキャンパス体験授業担当	2021年8月10日	英語文化学科での「オープンキャンパス英語体験授業」を行い、保護者への相談対応を実施。
29. Mukojo+More教員採用試験面接練習指導	2021年7月1日から現在	毎年、Mukojo+Moreプログラムとして「教員採用英語面接練習」を担当。小・中・高の教員免許を取得したい学生の英語面接練習を担当した。
30. 2021年度特別ゼミ担当	2021年6月23日	アメリカ分校から帰った学生のための特別ゼミを指導。「第一と第二言語を生かすためのトランスランゲージング法」という内容を実施。
31. 英語学習支援サポート教員	2021年4月から現在	武庫川女子大学の「英語学習相談室」サポート教員として全学の希望学生の英語学習の指導を行った。
32. 2年C組の担任	2021年4月から2022年3月	武庫川女子大学の英語文化学科2年C組担任の業務で、学生のガイダンス、保護者との懇談・相談などを行った。
33. 夏のイマージョンプログラム担当	2020年8月23日から2020年8月26日	鳥取大学夏休み期間中イマージョンプログラムのコーディネーターを担当。プログラム作成と実施、講師の

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
34. 千刈英語集中講座のコーディネーター	2017年4月から2019年9月	指導などを行った。 関西学院大学理工学部の3・4年生の一週間千刈英語集中講座のコーディネーターを担当。千刈キャンパス場に引率、プログラム作成、授業を行った。
35. 理工学部オープンキャンパス体験授業担当	2017年から2019年	関西学院大学理工学部のオープンキャンパス授業を行った。
36. オーストラリア語学研修の引率	2009年10月から2015年10月	高校2年生のオーストラリア研修プログラムの引率教員で、毎年、約2週間程度生徒に同行し、留学中に学生の生活と授業のサポートを行った。
37. 高文連の弁論・暗唱・ディベート大会指導と審査員	2005年7月26日から2016年3月31日	毎年、高校生のスピーチや暗唱、ディベート大会の指導と審査を行った。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 日本語能力試験1級JLPT N1	2010年	国際交流基金と日本国際教育支援協会
2. 通訳・翻訳講座修了	2007年3月	財団法人自治体国際化協会
3. 教員免許取得	2007年から現在	ビクトリア州教員教育委員会登録「登録番号：334398」
4. 上級日本語講座修了	2006年5月	財団法人自治体国際化協会
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学における外国語科目・国際交流に関する事項	2021年4月1日から現在	文学部教授会委員、入試会委員、外国語教育推進室委員、国際化専門委員、ACEプログラム委員、外国人非常勤講師コーディネータ委員、英語グローバル学科委員、文学部研究科委員、修士と博士の指導教員・審査委員、学科フォッシーン日下委員、英語文化専攻委員でコミュニケーションとACE関連科目のコーディネーター、JUSTEC学会準備委員。
2. 大学院指導	2020年7月1日から現在	大学院論文指導、博士論文・修士論文の外部審査官。
3. 鳥取大学における外国語科目・国際交流に関する事項	2019年10月1日から2021年4月1日	教育支援・国際交流推進機構全体会議教務委員、教育センター会議の教務委員、外国語部門英語非常勤講師担当、コミュニケーション科目担当、大学入試作成・監督・採点。
4. 関西学院大学における外国語科目に関する事項	2016年4月1日から2019年9月20日	ELR教務会のメンバー、外国人オフィス管理者、千刈英語集中講座コーディネーター。
5. 平松学院における外国語科目に関する事項	2005年7月24日から2016年3月31日	高校・短大の教諭、HP担当、部活顧問、英語教育開発。
6. ベイサイド中高等学校（オーストラリア）における外国語科目に関する事項	2005年1月23日から2005年6月30日	ベイサイド中高等学校の教育実習（日本語、英語とESL）の科目を担当した。
4 その他		
1. 2024年度地域別懇談会（本部会場）（神奈川会場）	2024年9月15日から2024年9月28日	英語グローバル学科代表で、保護者と学生への進路・学習・留学について相談対応。
2. JUSTEC学会運営委員	2024年4月から2025年9月	JUSTEC（日米教員養成協議会）2025年度大会が武庫川女子大学で開催するので、運営委員メンバーとして学会準備と開催時の運営。
3. 2023年度地域別懇談会（本学会所）	2023年9月17日	英語グローバル学科代表教員として学生および保護者などの相談対応。
4. 日下／フォッシーン国際交換特別教授職プログラム参加	2023年5月7日から2023年5月16日	国際交換特別教授職プログラムの交換教員として選出され、Eastern Washington University で合同研究、学生講義や市民公開講座をした。教えた科目は日本語、日本社会、言語学、バイリンガリズム、教育学習。
5. 2022年度地域別懇談会（本部会場）（高松会場）	2022年9月	英語文化学科代表教員として学生および保護者などの相談対応。
6. 学科日下／フォッシーン国際交換特別教授職プログラム委員	2022年4月から現在	Eastern Washington University の教授がフォッシーン日下プログラムで武庫川女子大学に訪問し、学科代表としてプログラム運営、来日中に来訪者を案内し、授業に同行し、研究討議を担当した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
7. ACE運営委員	2022年4月から現在	武庫川女子大学英語グローバル学科のACE運営委員で、英語上級者認定プログラムの運営と管理。
8. 国際化専門委員	2022年4月から現在	武庫川女子大学大学機関全体の国際化に関連する業務を担当。
9. 2021年度地域別懇談会（本部会場）	2021年9月	英語文化学科代表教員として学生および保護者などの相談対応。
10. 科目コーディネータ委員会委員	2021年4月から現在	武庫川女子大学の英語文化専攻での全てのコミュニケーションとACE関連科目のコーディネーター。
11. 文学部研究科委員	2021年4月から現在	武庫川女子大学の文学部研究科の委員会メンバー。
12. 外国人非常勤講師 コーディネーター	2021年4月から現在	武庫川女子大学英語グローバル学科の外国人非常勤講師のコーディネーターで、オリエンテーション担当、採用面接員、講師の運営・教務などを担当した。
13. 国際センター・外国語教育推進室委員会	2021年4月から現在	武庫川女子大学大学全体の英語教育を推進するための委員。
14. 非常勤コーディネーター	2019年10月から2021年3月	鳥取大学の共通教育センターの外国人非常勤講師のコーディネーターとして教員のマネジメントなどを担当した。
15. 教育支援・国際交流推進機構委員	2019年10月から2021年3月	鳥取大学の教育支援・国際交流推進機構委員で、教育センターのコース開発、留学生サポートなどを行った。
16. 千刈英語集中講座のプログラムコーディネーター	2018年4月から2019年9月	関西学院大学理工学部3・4年生の一週間千刈英語中講座のコーディネーターで、千刈キャンプ場に引率し、プログラム作成と運営を行った。
17. 入試関係	2005年3月から現在	高校、大学、大学院の入試関委員で、作成、監督、運営などの経験を有する。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. Teachers' and students' experiences within the Communicative Language Course of Study in Japan: An instrumental case study	単	2020年8月31日	オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学大学院の博士論文 Ed.D thesis, University of Southern Queensland,	日本におけるコミュニケーション言語教育（CLT）の導入と定着における社会的・文化的要因を考察した。高校教員およびCLT教育を経験した卒業生へのアンケートとインタビューを通じて、日本社会における教育観や文化的慣習がCLTの導入にどのように影響しているかを明らかにした。また、社会学的視点と教育実践の観点から、日本の教育現場に適したCLT実施モデルの提案を行った。
2. Sex and the Japanese: An investigative study of married couples, LGBT identifying individuals and Red-Light district workers in regard to their gender roles and sexual practices	単	2011年11月4日	英国国立シェフィールド大学大学院の修士論文 MA thesis, University of Sheffield	日本の地方に住むセクシュアル・マイノリティやセクシュアルライフに課題を抱える人々の声を記録・分析した質的研究を行った。セックスレスの既婚者、同性愛者、ナイトワーク従事者に対してインタビュー調査を行い、彼らの語る日常の困難や社会的スティグマ、支援の不足などを明らかにした。性とジェンダーの問題が地方社会の中でどのように認識されているかに迫った。
3. Communicative teaching: An investigative study of foreign language teachers' perceptions towards CLT and	単	2011年9月3日	オーストラリア国立サザンクイーンズランド大学大学院の修士論文 Master of Applied Linguistics thesis,	日本の高等学校におけるコミュニケーション言語教育（CLT）の実践と、新しい学習指導要領に対する現場教員の認識と懸念について調査した。二校に勤務する英語教員にアンケートとインタビューを実施し、現場でのCLTの実践状況、指導上の課題、そして新カリキュラムに対する適応の困難さなどの実態を明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
the new curriculum.			University of Southern Queensland	
3 学術論文				
1.Results of a COIL project between Japanese and American University Students「仮題」	単	2026年3月刊行予定	Mukogawa Literary Review (MLR) Vol.63. 武庫川女子大学英文学会紀要 63号 ISSN: 2759-6508 (投稿予定) (査読付)	4年ゼミの授業において、「Collaborative Online International Learning (COIL)」の要素を取り入れており、その効果と影響について研究を行った。このプログラムでは、イースタン・ワシントン大学と武庫川女子大学の学生たちが、教育、政治、文化、国際関係といったテーマについて異文化の視点を交換する。 授業終了後には、COILプログラムが学生の異文化理解力や異文化能力に与えた影響を分析するために、イースタン・ワシントン大学および武庫川女子大学の学生にアンケートを実施し、その結果を報告した。
2.Merging CLIL and Translanguaging in Content Classes to Foster Engagement「仮題」	単	2025年9月刊行予定	Springer Proceedings in Humanities and Social Sciences Title: Care, Innovation, and Sustainability in English Language Teaching: Select Proceedings of the 23rd AsiaTEFL International Conference 2025「(投稿予定)」(査読付)	日本の大学における英語によるコンテンツ科目の授業において実施された。この授業では、講義に加え、学生と教員による協働的なグループディスカッションも行われた。 トランスランゲージング手法を取り入れることで、学生は概念的なギャップを埋め、批判的に自らの考えを表現し、複雑な内容に主体的に関与することが促進された。 その結果、CLILとトランスランゲージングを組み合わせた指導が、学生の言語的背景を尊重した支援的な教室環境を促進し、より深い学習を促すとともに、学生の参加度、授業内容および使用言語の理解の向上に寄与することが示された。
3.Pedagogical Translanguaging in Japanese EFL Classes: A Case Study	単	2025年4月4日	PanSIG Journal, Vol. 10. pp 44-51. ISSN: 2759-9965 (査読付)	近年、ESL(第二言語としての英語)およびEFL(外国語としての英語)教育において、トランスランゲージング教育法の導入が広がっている。学生が教室内で自らの全ての言語レパートリーを活用することが、言語発達と知識構築の両面において有益であることが示されている(Deroo & Ponzio, 2019)。 本研究では、教育的トランスランゲージングアプローチを検討し、その結果を報告する。具体的には、トランスランゲージングアプローチを用いた「卒業セミナー」クラス(n=28)の学生に対して調査を行い、L2の授業においてL1を取り入れることが学生の言語発達および知識発展に有益であると感じたことを明らかにした。
4.From BICS to CALP: Developing Communication Courses within the EC Major	単	2025年3月	Mukogawa Literary Review (MLR) Vol.62. pp.2-11. 武庫川女子大学英文学会紀要 62号 ISSN: 2759-6508 (査読付)	英語グローバル学科英語文化専攻におけるコミュニケーション科目の開発について探求し、これらの科目の創設、作成、および実施に影響を与えた哲学的および理論的枠組みを概説する。 前カリキュラムおよび改訂カリキュラムの両方においてコミュニケーション科目のコーディネーターを務めた立場から、これらの科目が現代の教育要件に適應するためにどのような重要な発展を遂げたかについて論じた。
5.From Student, to Teacher, to Researcher, and Back Again: How Experiences Shape Professional Development	単	2024年4月	Profectus, Vol. 29. pp. 115-131. ISSN:0919-3553・Apr 1, 2024 (査読付)	研究者になるための道のりについて発表した内容をまとめた論文である。学生時代から研究者に至るまでの実体験を紹介し、研究者にとって「経験」と「実践」の重要性について論じた。
6.英語学習のためのAIツール使用に関するアンケート調査ー英語リテラシー教育ブ	共	2024年3月	武庫川女子大学情報教育研究センター紀要 Vol 31. pp.1-7. ISSN:	川西慧、田中真由美、Kevin Bartlett、佐々木顕彦。 本稿の著者らが所属する専攻では、英語学習にAI(artificial intelligence)を利用するリテラシー教育プログラムの枠組みを検討し、その実施に先んじて学生のAIツール使用について調査した。そ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
プログラムの実施に向けてー			2436-7168 (査読付)	の結果、すでに多くの学生がAIに触れ、利用していることが明らかとなり、その多くがAIを肯定的に感じていることがわかった。また、AIを利用した学習については、AIに従来の教師のようなフィードバック機能を求めていることや、全体ではなく部分的な使用など、限定的な使用が適切だと思っていることなども明らかになった。
7.外国語としての英語科目におけるトランスランゲージング教育法：理論的概要	単	2024年3月	Mukogawa Literary Review (MLR) 61号(pp.47-54) 武庫川女子大学英文学会紀要 ISSN: 1340-9441 (査読付)	「トランスランゲージング」の理論的概要について概説した。トランスランゲージング教育法は日本においてまだ導入の初期段階にあるため、その基本的な概念、効果、及び授業での活用方法について紹介した。
8.Developing Research Skills in Graduation Seminar Classes	単	2023年12月	AsiaTEFL 2023: Papers from the 21st AsiaTEFL Conference. pp. 537-545. (ISBN: 979-11-982534-0-8) (査読付)	ブルームのタキシノミーに従った卒業研究ゼミの授業設計方法を探求した。 CLIL（内容言語統合型学習）やトランスランゲージングアプローチを取り入れることによって、研究スキルの向上と言語習得の促進を図るために設計されたタスクの概要を説明した。
9.Translanguaging: Theoretical and Pedagogical Implications in the Japanese ESP classroom	単	2022年1月7日	OnCUE Journal Special Issue, Vol.3, p.15-33 ISSN:1882-0220 (査読付)	日本の大学におけるESP (English for Specific Purposes) 授業で実施したトランスランゲージングのアプローチに関する報告を行った。 まず、トランスランゲージングの理論的背景を紹介し、英語の授業において学習者の母語（日本語）を取り入れることの利点を、心理言語学的、社会言語学的、教育的視点から論じた。 次に、授業内容の概説を通じて、トランスランゲージングが学習者の言語保持、伝達アウトプット、動機付けの増大にどのように寄与したかを記述した。 参加者は、90名の日本語を母語とする理工学専攻の大学生で、大学で必修の英語授業を履修していた。授業では、専攻に関連するトピックに関する小論文の執筆や発表を行った。 その結果、トランスランゲージングを用いることで、学習者は全ての言語資源を活用し、動機付け、言語産出、学習内容の保持、認知戦略の増大を促進できることが明らかになった。
10.An Analysis of student' s experiences within the Communicative Course of study in Japan.	単	2021年6月3日	Tottori University Education Center Bulletin. Vol. 17.p. 43-64. ISSN: 2433-7862 (査読付)	高等学校英語の新カリキュラムにおける学生の経験について77名の学生に対してアンケートを実施し、インタビューを行った。 その結果、授業中に教員が英語を話す機会を提供していないこと、学生がもっとコミュニケーションを取りたいと感じていること、また、センター試験（大学入学共通テスト）の影響が大きいために、新カリキュラムの目標に到達できていないことが明らかになった。
11.Teacher Praxis in the Course of Study Guidelines in Japan: An Empirical Analysis	単	2020年8月	Australian Journal of Applied Linguistics, Vol 4 (2). p. 168-182. ISSN: 2209-0959 (査読付)	高等学校英語科の新カリキュラムにおける教員の経験について21名の教員に対してアンケートとインタビューを実施した結果、教員は自身の英語コミュニケーション能力に自信がなく、言語教育の指導方法について十分に理解していなかったことが明らかになった。 また、職場環境により、コミュニケーション重視の授業が実施できなかったため、新カリキュラムの目標に達成できなかったことが判明した。
12.The influence of Socio-Cultural Constructs on Educational praxis in Japan.	単	2019年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 23. p. 73-82. ISSN: 1342-8853 (査読付)	日本社会に見られる社会文化的影響に基づき、内集団・外集団の区別や先輩・後輩の上下関係といった社会現象を考察し、それらが教育活動や授業運営、学習者の相互作用に及ぼす影響について分析した。
13.Applying	単	2018年6月	IAFOR: The Asian	日本語と英語を一つの言語システムとして捉え、学生がアクセスで

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
translanguaging techniques in Japanese EFL settings.			Conference on Language Learning. Official Proceedings, 2018 Vol.1 (1). p. 239-251. ISSN : 2186-4691 (査読付)	きる資源として活用するトランス・ランゲージングに関する調査を行い、二つの言語を同時に使用することで学生の理解力が向上することを明らかにした。4つのクラスで調査を実施し、二つのクラスでトランス・ランゲージングを導入し、残りの二つのクラスでは導入しなかった。学期末のテスト結果や英語プレゼンテーションの結果、さらに学期末アンケートをもとに分析を行い、トランス・ランゲージングの効果を報告した。
14.The use of L1 in L2 classrooms in Japan: A case study of university student preferences.	単	2018年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 22. P. 71-80. ISSN: 1342-8853 (査読付)	英語授業における学習環境設定について、日本人学生に調査を実施した。調査の結果、学生からはバイリンガル教員による指導が、より多くの学びを提供するとの意見が多く寄せられた。本論文では、バイリンガル教育の理論を説明した上で、どのような方法で指導すれば学生により効果的に学習を促進できるかについて考察した。
15.The divide between policy and pedagogy in EFL high school classrooms in Japan	単	2017年11月	PEOPLE: International Journal of Social Sciences. Vol 3 (3).P.198-217. ISSN:2454-5899 (査読付)	日本のコミュニケーション言語教育と新カリキュラムに関して教育現場での授業内容を企業活動にどのように活用できるかという課題について調査を行い、教員の意見をまとめた。さらに、推奨されるカリキュラム構成や、クラスの種類ごとの違いについても考察を行った。
16.Personality profiles, learning styles and the Japanese University student : An exploratory survey.	共	2017年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 21. P. 73-80. ISSN: 1342-8853 (査読付)	Audrey Moreno, Kevin Bartlett. 本研究では、日本人学生を対象に性格診断テストを実施し、その結果を分析した。得られたデータをもとに、日本人学生に対してどのような授業設計が効果的かについて論じた。
17.Japanese teachers' attitudes towards incorporating CLT in the high school English Language classroom : An ethnographic study.	単	2017年2月	Kwansei Gakuin University Humanities Review. Vol 21. P. 93-104. ISSN: 1342-8853 (査読付)	コミュニケーション言語教育と日本の新カリキュラムにおける教師の意を把握することを目的に、新カリキュラム導入前後に、二校に勤務する教員を対象にアンケートおよびインタビューを実施した。 彼らのコミュニケーション言語教育の実践経験や、新カリキュラム導入による効果について調査・分析を行った結果、教員のコミュニケーション言語教育の理解を高める必要があると明らかとなった。
18. 語学クラスにおけるイマージョン（没入法）: Immersion in the language classroom	共	2007年7月	第46回九州地区私立高等学校研修会研究集録. P. 197-207 (査読無)	藤原和彦, Kevin Bartlett。オーストラリアの公立ベイサイド高校で実施されたイマージョンプログラムを、大分県の私立大分東明高等学校の英語クラスに応用した際のプログラム作成過程と、生徒の理解度調査の結果について発表した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1.Incorporating Translanguaging in Japanese EFL classrooms: A workshop and Discussion.	単	2023年6月17日	Kobe JALT: Translanguaging Presentation and Workshop. Mint Kobe Building, Kobe Gakuin University.	本発表では、授業にトランスランゲージングを組み込む方法を紹介した。基本的な理論の説明に加え、実際にトランスランゲージングを導入した授業例を提示し、その後、参加者同士でディスカッションを行い、自身の授業にどのように取り入れるかについて意見を交換した。
2.Promoting Critical Thinking with Bilingual / Multilingual learners	単	2023年5月16日	日下／フォッシー国際交換特別教授職プログラム、Eastern Washington University, Spokane,	本発表では、日本の大学における卒業研究科目で実施したトランスランゲージング・アプローチについて報告した。まず、トランスランゲージングの理論的背景を紹介し、英語の授業において学習者のL1（日本語）を活用することの利点を、心理言語学的、社会言語学的、教育的視点から論じた。 次に、授業内容の概要を通じて、トランスランゲージングがいかに学習者の言語保持力、伝達能力、動機付けの向上に寄与したかを記

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
			Washington, USA.	述した。その結果、学習者の言語レパートリー全体を活用することで、動機付け、言語産出、学習内容の定着、認知方略の向上が促進されることが明らかとなったという点について報告した。
2. 学会発表				
1. Translanguaging as a Bridge for Learning and Cultural Inclusion	単	2025年9月6日8	34th Japan-U.S. Teacher Education Consortium 教員養成協議会 第34回会 内定済（予定中）	ゼミで実施したCOILプロジェクトの内容について発表。このプロジェクトは、武庫川女子大学の学生とイースタン・ワシントン大学の学生との間で行われ、COIL授業の準備段階として、武庫川の学生たちは複数のトピックについて、トランスランゲージングを用いて理解と認識を深める活動を行った。その後、イースタン・ワシントン大学の学生と英語でのCOIL授業に参加した。 本発表では、このプログラムがどのように設計され、9週間にわたってどのように実施されたかを概説し、アンケートの結果を紹介する。
2. Merging CLIL and Translanguaging in Content Classes to Foster Engagement	単	2025年7月10日13	23rd AsiaTEFL International Conference 2025. Hong Kong July 10-13. 内定済（予定中）	本研究は、日本の大学レベルのコンテンツ科目の授業において実施された。授業では、講義に加えて、学生と教員による協働的なグループディスカッションが取り入れられた。トランスランゲージングの手法を取り入れることで、学生は概念的なギャップを埋め、批判的に自分の考えを表現し、複雑な内容により主体的に関与することが促された。その結果、CLILとトランスランゲージングの組み合わせが、学生の言語的背景を尊重する支援的な教室環境を促進し、より深い学習を促し、学生の参加や授業内容と言語の理解を向上させたことを示す。
3. Incorporating L1 in L2 Classrooms through Translanguaging	単	2025年2月15日	21st Annual CamTESOL Conference 2025. Phnom Penh, Cambodia, Feb 14-16, 2025.	第二言語教育の現場において、学生の第一言語を意図的に取り入れる方法を通して、批判的思考とアクティブラーニングを高める教授法を提案した。日本の大学における具体的な授業事例を基に、教育的トランスランゲージングの効果と応用可能性について議論を展開した。参加者は、自身が教えるバイリンガル／マルチリンガル学生への支援の在り方を見直し、実践に取り入れるための示唆を得る機会となった。
4. Integrating Pedagogical Translanguaging in EFL Classes	単	2024年11月18日	全国語学教育学会 2023年第50回年次国際大会 静岡コンベンションアーツセンターグランシップ JALT 2024: 50th Annual International Conference, Shizuoka Granship, Shizuoka Japan. Nov 15-18	日本の大学において3年次および4年次の授業で実施したトランスランゲージング・アプローチに関する2年間の研究成果を報告した。統合型モデルを導入することで、学生が自らの第一言語を戦略的に活用しながら、第二言語の学習を通じて言語的・内容的・認知的な成長を遂げるプロセスを明らかにした。さらに、全言語レパートリーの活用が、言語知識と内容知識の統合的発展、そして自己主導的な学びの促進につながることを示した。
5. Pedagogical Translanguaging: The Basics	単	2024年5月24日~26	JALT PanSIG Conference 2024, Fukui University of Technology. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会 2024, 福井工業大学。	教育的トランスランゲージング (Pedagogical Translanguaging) の概念を紹介した。理論的背景の解説の後、教室内で第一言語と第二言語を同時に活用することの教育的効果について述べ、具体的にどのようなタスクやアプローチを用いることで、学習者の内容理解と言語習得を支援できるかを示した。参加者には、授業での実践に活用可能なアイデアを提供した。
6. Promoting Critical Thinking in L2 Graduation Seminar Classes	単	2023年11月27日	全国語学教育学会 2023年第49回年次国際大会 つくば国際会議場 JALT 2023: 49th Annual International	批判的思考、研究スキル、言語習得を融合させた卒業研究科目において、どのように学生の探究力を促進する授業を設計したのかを発表した。理論と実践を結びつけたアプローチを中心に紹介した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. 英語学習のためのAIツール使用に関するアンケート調査 — 英語リテラシー教育プログラムの実施に向けて —	共	2023年8月19日	Conference, Tsukuba, Japan. Nov 24-27 全国英語教育学会第48回香川研究大会（香川大学教育学部）	田中真由美、川西慧、Kevin Bartlett、佐々木顕彦。英語学習にAI (artificial intelligence)を利用するリテラシー教育プログラムの枠組みを検討し、その実施に先んじて学生のAIツール使用について調査した。その結果、すでに多くの学生がAIに触れ、利用していることが明らかとなり、その多くがAIを肯定的に感じていることがわかった。また、AIを利用した学習については、AIに従来の教師のようなフィードバック機能を求めていることや、全体ではなく部分的な使用など、限定的な使用が適切だと思っていることなども明らかになった。
8. Developing Research Skills in L2 English Classes	単	2023年8月18日	The 21st AsiaTEFL International Conference, Daejeon Convention Center, South Korea	卒業研究科目における研究スキルの指導方法について発表した。15週間のセミナー設計の概要をもとに、批判的思考の導入方法や、学術的探究心を育むための活動について紹介した。
9. From Student, to Teacher, to Researcher, and Back Again: Journeys in Developing Research Skills	単	2023年7月29日	武庫川女子大学大学院英子英米文学研究科：院生研究会	自身の学生時代から研究者としての現在に至るまでの経験を振り返り、研究スキルの育成過程や、研究活動に対する姿勢の変遷について紹介した。若手研究者や学生に向けて、学びの軌跡と研究への向き合い方を共有する発表となった。
10. Promoting Research Skills in Graduation Seminar Classes	単	2023年5月13日	JALT PanSIG Conference 2023, Kyoto Sangyo University, Kyoto, Japan. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会2023、京都産業大学	日本の大学で実施した研究指向の授業におけるトランスランゲージングの活用について報告した。授業設計と実施内容の概要を通して、このアプローチが学習者の言語保持力、アウトプット力、そして学習意欲の向上にどのように寄与したかを示した。
11. Incorporating CLIL and Translanguaging Approaches in Research Focused Classes	単	2022年11月14日	全国語学教育学会2022年第48回年次国際大会 福岡 JALT 2022: 48th Annual International Conference, Fukuoka International Congress Center, Fukuoka, Japan	卒業論文の作成は大学生活の集大成であり、多くの学生にとって大きな挑戦となる。しかしながら、研究デザインやデータ分析のスキルは学位課程の終盤まで系統的に指導されないことが多く、学生が戸惑う場面も少なくない。本発表では、ブルームのタキシノミーを学習の進行ガイドとして活用し、3年生ゼミにおいて、トランスランゲージングとCLILの要素を取り入れながら、論文の書き方、研究方法、学会発表スキルを統合的に指導した実践を紹介した。この指導を通して、学生が自身の専門知識を活用し、4年次の卒業研究に向けた十分な準備を整えることができた。
12. Content and Language Integrated Learning in a Japanese University class	単	2022年8月7日	The 20th AsiaTEFL International Conference, University of Negeri Malang, East Java, Indonesia.	大学のEAP教室においてCLILアプローチを活用する利点について報告した。15週間にわたる授業実践を通じて、専門的内容を英語で学ぶことの効果や、学習者の知的関与を高める指導法を紹介し、カリキュラムの構成や実施上の工夫についても詳述した。
13. CLIL and Translanguaging in EAP Classes	単	2022年7月9日	JALT PanSIG Conference 2022, Nagano University,	日本の大学におけるEAP（学術目的の英語）授業において、CLIL（内容言語統合型学習）とトランスランゲージングのアプローチを組み合わせた実践事例を発表した。15週間のセミナーでのカリキュラム設計から実施、そして学習成果について報告し、両手法の相乗効果

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
14. The State of EFL Education in Japan	単	2022年2月26日	Japan. 全国語学教育学会・分野別研究部会大会2022、長野県立大学 The 33rd Spokane Regional ESL Conference, Spokane, Washington, USA.	と学生の反応を紹介した。 現行の教育指導要領と、実際の英語授業で行われている指導との間にあるギャップについて考察し、現場で感じられている課題とその背景を説明した。英語コミュニケーション能力の育成に焦点を当て、効果的な指導方法についても紹介した。MUSCの教員のために日本の教育環境を理解するためにも発表した。
15. Integrating L1 in L2 Classrooms: A Translanguaging Approach	単	2021年12月3日から5日	19th AsiaTEFL International Conference, JW Marriott Hotel, New Delhi, India (On-site and Online Conference).	日本の大学におけるESP（特定目的のための英語）クラスで、L1とL2を併用するトランスランゲージングの手法を取り入れた事例を発表した。授業の設計・運営方法を紹介しながら、学期末に行った調査データをもとに、学生のコミュニケーション頻度とモチベーションが向上したという結果を報告した。
16. Bilingual Approaches to Support Japanese EFL Learners	単	2021年11月26日	The 28th PGECR Symposium, The University of Southern Queensland, Toowoomba Campus (11月26日)	日本人学生の外国語学習を支援するためには、日本語と英語の両方を効果的に活用することが有効であるという立場から、授業準備や指導方法に関する具体的なヒントを紹介した。学習者の理解力とモチベーションを高めるために、教師が意識すべき観点やクラス運営の工夫について提案を行った。
17. Assisting in Transition: Translanguaging for New University Students	単	2021年9月11日	JALT College and University Educators Online SIG Conference 2021	学生が高校から大学へ進学する際に感じる英語授業でのプレッシャーについて発表した。高校と大学の授業スタイルの違いや、学生が直面する不安要素（授業の進行スタイル、コミュニケーションの構造、学習の目的意識の欠如）を明らかにした。その結果、こうした不安が学習意欲に影響を与えることが分かったため、対策として教室内でのトランスランゲージング活用の重要性を述べ、コミュニケーション力とモチベーションの向上に寄与することを示した。
18. Transitioning from high school to university EFL classes: Student voices	単	2020年11月	全国語学教育学会第46回年次国際大会【筑波】 JALT 46th International Conference, Tsukuba Convention Center, Tsukuba 11月16から23日	学生が高校から大学へ進学した際、英語の授業でいろんなプレッシャーを感じる。高校生の時の授業と大学生の授業ではどのような違いがあるのか、そしてどのようなプレッシャーを感じるのかについて発表した。その結果、授業のながれや、コミュニケーションの仕組みに関する不安と英語を勉強する目的がわからないことで、勉強に関する影響があることを報告した。
19. Translanguaging approaches in Confucian contexts, a case study from the Japanese university classroom.	単	2020年11月	The 18th AsiaTEFL International Conference, KINTEX, Goyang, South Korea (11月26から30日)	アジア地域の学生の外国語能力は、ヨーロッパ諸国に比べて相対的に低いという現状がある。 このレベルを向上させるためには、学生のニーズを正確に把握し、彼らの文化的背景を考慮する必要がある。トランスランゲージングを活用することで、学生が自分の経験を述べる事が出来るし、理解力とモチベーションをさらに高めることができると主張した。
20. Translanguaging: Theoretical and Pedagogical implications in the Japanese ESP classroom	単	2020年9月	JALT College and University Educators SIG Conference 2020, Kumamoto. (9月17)	学生は専門的知識を身につけている一方で、その内容を英語で的確に伝える力が不十分であるという課題がある。専門用語やプレゼンテーションレベルを高くするため、そしてニーズを理解させるため、学生の就職先について考えなければならない。トランス・ランゲージングを使って、より学生の理解力とモチベーションを高めることができると主張。
21. Translanguaging Benefits in Japanese EFL	単	2019年11月	全国語学教育学会第45回年次国際大会（名古屋）	学生は専門的知識を身につけている一方で、その内容を英語で的確に伝える力が不十分であるという課題がある。就職活動を見据え、専門用語の習得やプレゼンテーション能力の向上が必要とされる中

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
classes			JALT 45th International Conference. WINC Aichi, Nagoya. (11月1日から4日)	で、トランスランゲージングの活用が効果的であることを示した。L1を戦略的に用いることで、学生の理解促進とモチベーションの向上を同時に図ることが可能であると主張した。
22. Reflecting on research' How research findings shaped pedagogical practice	単	2019年6月	The 23rd PGECR Symposium, The University of Southern Queensland, Springfield Campus (6月28日)	言語教育に関する実証研究を通じて、英語でのコミュニケーションに対して不安を抱える学生が多いことが明らかになった。この結果をもとに、より安心して学べる環境づくりの重要性と、それに寄与する教授法としてトランスランゲージングの有効性を紹介した。本発表では、調査データを提示しながら、学習者の不安を軽減しながら英語力を伸ばす新たなアプローチについて説明した。
23. Code-switching in Japanese EFL praxis: How translanguaging can benefit language learners.	単	2019年2月	The 7th Bremen Symposium on Language Learning and Teaching at Universities. University of Bremen, Germany (2月28日から3月2日)	日本の大学生にとって、英語のみを使用する授業よりも、母語である日本語をある程度取り入れる授業の方が効果的であるという主張を展開した。特に初級から中級レベルの学習者においては、L1の適切な使用が理解促進と心理的安心感につながる点に注目し、実際の授業例を交えて説明した。
24. Integrating L1 in L2 classrooms to increase motivation, comprehension, and the communicative abilities of Japanese learners.	単	2018年10月	Otemae University and Kobe JALT Joint Symposium on World Englishes, Bilingualism and Cross-Cultural Education (10月21日)	L1 (日本語) と L2 (英語) を同時に活用することで、学習者の理解力およびモチベーションをより高めることができるという立場から発表を行った。4つのクラスを対象に調査を実施し、そのうち2クラスではトランスランゲージングを導入し、残りの2クラスでは従来の一言語使用による授業を行った。分析の結果、トランスランゲージングを導入したクラスの方が、学生間のコミュニケーション頻度が高まり、学習への積極性も向上したことが示された。
25. Improving communication and increasing motivation through the incorporation of translanguaging.	単	2018年9月	JALT CUE Conference, Rikkyo University, Tokyo. (9月15日から16日)	日本語と英語の二言語を柔軟に使い分けることで、学生の理解を促進できるというトランスランゲージングの効果について報告した。4つのクラスを対象に、2つのクラスではトランスランゲージングを用い、他の2つでは使用しなかった。学期末のテストおよびプレゼンテーションの成果を比較し、教育効果の違いを分析した。最後に、実践例と調査結果をもとに、今後の応用可能性について議論した。
26. Discovering what approaches work in Japanese EFL classrooms: Considerations for teaching and learning in Japan.	単	2018年7月	The 21st PGECR Symposium, University of Southern Queensland Springfield campus (7月27日)	オーストラリア人研究者を対象に、日本の社会・文化、そして教育システムの特徴について解説した。特に、日本の学習者に適した授業設計を行うための文化的配慮や教授法上の工夫について、具体的な事例を交えてアドバイスを提供した。セッションの後半では、参加者との質疑応答を通じて意見交換を行い、異文化間教育における理解を深める機会となった。
27. Applying translanguaging techniques in Japanese EFL settings.	単	2018年4月	IAFOR: The Asian Conference on Language Learning, Arts Centre of Kobe (4月27から29日).	トランスランゲージングを教育実践にどう取り入れるかをテーマに発表した。授業内で日本語と英語を柔軟に使い分けることで、学習者の理解が深まり、英語力の向上にもつながるという仮説のもと、4つの大学クラスを対象に比較研究を実施。結果から、L1の戦略的な活用が学習効果に好影響を与えることが示唆された。具体的な授業事例や学生の反応を紹介しながら、教育現場での応用の可能性について参加者と意見を交わした。
28. Incorporating translanguaging in EFL university classrooms.	単	2018年1月	関西学院大学理工学部ファカルティ・ディベロプメント発表会 (1月	日本語と英語を一つの統合された言語システムとして捉え、学習者が利用可能な資源として活用できるというトランスランゲージングの考え方について発表した。4つのクラスを対象に、2クラスではトランスランゲージングを導入し、他の2クラスでは従来型の教授法を

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
29.The divide between policy and practice in EFL high school classrooms in Japan	単	2017年7月	15日) 20th International Conference on Teaching, Education and learning. University of Barcelona, Spain (7月25から28日)	用いた。学期末に実施した英語の筆記テストおよびプレゼンテーションの成績を比較・分析し、トランスランゲージングが理解力やパフォーマンスに及ぼす影響について考察した。発表後には参加者との質疑応答を行った。
30.The divide between pedagogy in EFL high school classrooms in Japan and what it means for university teachers	単	2017年1月	関西学院大学理工学部ファカルティ・ディベロプメント発表会（1月17日）	日本の新カリキュラムにおけるコミュニケーション言語教育の導入とその応用可能性について発表した。本発表では、学校教育で培われるスキルが企業現場でどのように活かされ得るのかを検討し、複数の教育機関の教員から得られた知見をもとに議論を展開した。また、具体的な授業設計例や、学習者の背景によるアプローチの違いについても紹介した。
31.The implementation of CLT in Japanese High Schools: Organizational hindrances to a smooth transition	単	2013年9月	全国語学教育学会・大分部 Second Annual Oita JALT Language Teaching Symposium (9月19日)	日本のコミュニケーション重視の言語教育と新カリキュラムの実施に関する論文を発表した。教育現場での授業内容を企業にどのように応用できるかという課題について調査を行い、教員の意見をまとめた。また、推奨されるカリキュラムおよびクラスごとの差異についても述べた。
32. 日本でのコミュニケーション言語教育。(Communicative Language Teaching and the New Curriculum)	単	2012年10月	全国語学教育学会・大分部（10月27日）	日本のコミュニケーション重視の言語教育と新カリキュラムについて発表を行った。南クイーンズランド大学大学院での卒業論文に基づくデータの説明や、コミュニケーションを中心とした教育手法について紹介した。その後、質疑応答を実施した。
33. 語学クラスにおけるイマージョン（没入法）: Immersion in the language classroom	共	2007年7月	第46回九州地区私立高等学校研修会（7月26から27日）	九州地区私立高等学校研修会（大分大会）において、藤原和彦先生と共同で発表を行った。オーストラリアの公立バイサイド高校で実施したイマージョンプログラムを、大分市立大分東明高等学校の英語クラスに応用した際のプログラム作成過程と、生徒の理解度調査の結果について報告した。その後、発表に関する質疑応答を行った。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2023年5月から現在		JASELE		
2. 2020年4月から現在		Asia TEFL		
3. 2017年4月から現在		Japan Association of College English Teachers		
4. 2007年6月から現在		Victorian Institute of Teaching		
5. 2006年6月から現在		Japanese Studies Association of Australia		
6. 2006年6月から現在		Asian Studies Association of Australia		

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
6. 研究費の取得状況	
7. 2006年5月から現在	Japan Association for Language Teachers